

コイ目コイ科

# ミナミアカヒレタビラ

*Acheilognathus tabira jordani* Arai, Fujikawa and Nagata, 2007

島根県:絶滅危惧 I 類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価:分布限界種(西限)

環境省:絶滅危惧 I A類(CR)

## 【選定理由】

県内での生息地はきわめて少なく、局所的である。近年生息が確認されている河川でも生息個体数の減少や産卵母貝であるイシガイ科二枚貝の減少が確認されており、近い将来絶滅が危惧される。

## 【概要】

従来アカヒレタビラとされていたものが、アカヒレタビラ、キタノアカヒレタビラ、ミナミアカヒレタビラの3亜種に分けられ、山陰地方と北陸地方に生息するタビラはミナミアカヒレタビラとなった。県中部の河川はミナミアカヒレタビラの西限分布域である。全長の最大は8cmで、野生化での寿命は2~3年、産卵期は4~6月である。なお本種は2012年3月に島根県の指定希少野生動植物に指定され、捕獲等が原則禁止となった。

## 【県内での生息地域・生息環境】

県中部及び東部の限られた河川にのみに生息する。県中部の河川においてはきわめて狭い範囲にのみ生息して

おり、約10年間で生息数が10分の1以下に激減した。県東部では近年まで広範囲に分布していたが、現在その分布域は急速に縮小している。現在分布が確認されている河川においても河川環境の悪化などにより本亜種の産卵母貝が減少している。また、2013年度にミナミアカヒレタビラの主要な繁殖地でイシガイ科二枚貝の大量へい死が確認されたことから、次年度以降はさらに個体群が縮小すると予測される。

## 【存続を脅かす原因】

河川改修等による生息環境の悪化やオオクチバス等の外来魚の移入、産卵母貝である二枚貝の減少などが考えられる。特に、二枚貝の減少はミナミアカヒレタビラ個体群の縮小にもっとも大きな影響を与えており、二枚貝は河川改修による生息場の消失、ヌートリアによる食害、水質や底質悪化により減少している。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○															○					

コイ目ドジョウ科

# イシドジョウ

*Cobitis takatsuensis* Mizuno, 1970

島根県:絶滅危惧 I 類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価:基準標本産地

環境省:絶滅危惧 I B類(EN)

## 【選定理由】

県中西部の限られた水系にしか生息していない上に、生息に適した環境も限られている。生息個体数も多くなく、大きな移動もしないことなどから、絶滅が危惧される。

## 【概要】

日本固有の小型のシマドジョウ属魚類で、1970年に高津川水系の福川川で発見され、新種として記載された。全長は通常4~6cmで、最大でもオス6cm、メス8cm未満。尾柄背縁と腹縁に竜骨状隆起が発達し、他のシマドジョウ属魚類に比べ寸胴である。体色は白色から淡黄褐色で、背びれと尾びれに3~5本の暗色点列がある。中国地方と九州地方に分布している。頬部に縦帯を持ち、背部から体側中央にかけて3列の暗色縦帯を持つものが多い。河川上流から中流の礫が積み重なる水通しのよい淵尻に生息し、水温が13~15℃になると砂礫底に深く潜りこんで越冬する。5月下旬から7月中旬が繁殖期で、

その時の水温は16~20℃であることや、大きな移動は行わず、雑食性で、天然での寿命は約2年であることなどが分かっている。四国に分布しているものは他の地域に分布しているイシドジョウと比べて形態が違うことから、2006年11月に新種とされヒナイシドジョウとなった。その特徴は鼻先から眼を貫いて1本の褐色線があり、ほほに線が無く、尾びれの根元に小さな黒点があることなどで、イシドジョウと見分けられる。

## 【県内での生息地域・生息環境】

県中西部の河川の上中流部で確認されている。一部の生息地はダム建設により消滅する。礫が積み重なった水通しのよい場所に生息し、泥の堆積のない淵尻部など、生息域はかなり限定されている。

## 【存続を脅かす原因】

ダムの建設、河川改修や流域開発による淵の消失、礫底の目詰まりなど。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
	○	○				○					○										

汽水・淡水魚類

絶滅 野生絶滅

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

サケ目サケ科

# ゴギ

*Salvelinus leucomaenis imbricus* Jordan and McGregor, 1925

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価:基準標本産地

環境省:絶滅危惧Ⅱ類(VU)

### 【選定理由】

西中国山地を流れる一部の河川にのみ分布し、河川上流域に生息する。開発や河川改修、自然林伐採などによる生息環境の荒廃で生息数が減少している。

### 【概要】

全長20-30cm前後だが、近年は30cmに達するものはまれである。他のイワナの亜種とは異なり、背部に見られる虫食い状の白色斑が吻端まで存在するのが本亜種の特徴である。本亜種は世界のイワナ属魚類の中で、もっとも南方に分布するもののひとつであり、氷期の遺存的な存在だと考えられる。水質が良好で、夏でも水温が20℃(多くは15℃以下)を超えない河川の最上流域に生息し、おもに昆虫類や小動物を捕食している。繁殖期は10月下旬から11月中旬で、メスが川底に産卵床を掘り、その中に産卵する。ふ化した仔魚は翌春まで産卵床内にとどまり、腹部の卵黄で発育していく。本亜種は稚魚期から障害物や岩陰に潜む性質が強く、野外ではなかなか発見し

づらい。

### 【県内での生息地域・生息状況】

県内では斐伊川水系から高津川水系まで分布するが、どの生息地でも生息数は減少傾向にあると思われる。近年、本亜種の生息域に別亜種ニッコウイワナの生息が確認されており、亜種間雑種形成による遺伝的独自性の喪失、遺伝子汚染が心配される。また、本亜種の生息域にヤマメなどのサケ科魚類を移入すると、競合によって本亜種が減少する可能性がある。近縁種、競合種の移入は厳に慎まなければならない。

### 【存続を脅かす原因】

河川改修や構造物の建設。水質汚染。伐採による広葉樹の減少。近縁種の移入による遺伝的独自性の喪失。競合する魚類の移入。釣りなど捕獲による採集圧。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○				○															

トゲウオ目トゲウオ科

# 日本海系イトヨ

*Gasterosteus* sp.

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価:分布限界種(南限)

環境省:絶滅のおそれのある地域個体群LP

### 【選定理由】

北方系魚種であり、県内は南限域となる。宍道湖・中海水域以外ではきわめてまれであり、当水域においても最近減少が著しい。

### 【概要】

本種は、背びれに3本と腹びれに1対の鋭い棘をもち、体側に連続した大きなうろこ(鱗板)が並ぶ。従来、イトヨと称されていたが、日本海系イトヨと太平洋系降海型イトヨ、太平洋系陸封型イトヨに分類された。日本海系イトヨの分布は、北海道から島根半島の日本海側、北海道から利根川の太平洋沿岸、北海道オホーツク海沿岸で、国外ではサハリンや千島列島、朝鮮半島東岸である。産卵期は春で、成魚は河川を遡上し、流れの緩やかな水草帯で産卵する。産卵生態はユニークで、赤と青の婚姻色の出たオスが水草などでトンネル状の巣を作り、メスを誘って産卵させ放精する。その後、オスは卵と孵化仔魚を保護する。水生昆虫や小型の甲殻類などを食べる。

### 【県内での生息地域・生息環境】

かつては、産卵期の春に、全県下の河川の下流域や水田の用水路に普通に見られたが、戦後の高度成長期を境にして激減した。宍道湖・中海水域は一時の絶滅状態の時期を経て、生息数は徐々に回復していた。産卵遡上前の3月に、当水域に張られた小型定置網において、1994年頃は1回の操業で数十個体も漁獲されていたことがあるが、2001年頃からは数個体程度となり、一時漁獲数が増えた時期もあったが、2010年頃からはほとんど漁獲されなくなっている。

### 【存続を脅かす原因】

水質と河川改修などに伴う生息環境の悪化。産卵場所と巣の材料となる水生植物の減少。生息域における夏季の高水温。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
○	△	△	△													○					○	○

ダツ目サヨリ科

# クルマサヨリ

*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)

島根県：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

### 【選定理由】

かつて宍道湖・中海水域においては一般的な魚種であったが、1990年前後より激減し、現在ではきわめてまれとなった。

### 【概要】

全長10-18cm。近縁のサヨリに似るが、本種は成長しても全長18cmと小型である。また、下顎がより長く、先端下面が黒色で、サヨリのように朱紅色はない。汽水性の魚で、サヨリほど海域と河川を広範囲に回遊することはない。青森県以南の内湾や河口に成育し、朝鮮半島や中国などに分布が知られる。

### 【県内での生息地域・生息環境】

大型河川の感潮域と宍道湖・中海水域、神西湖などに見られる。だが、最近はいずれの水域でも減少が著しく、きわめてまれな魚種となった。宍道湖・中海水域においては、定置網や刺し網などで、1回に十数匹から数十匹単位で漁獲されていたが、最近ではこのようなことも減

少している。

### 【存続を脅かす原因】

宍道湖・中海水域の場合は、埋め立てや護岸工事による渚と藻場の減少が、産卵や餌場また稚幼魚の成育場の喪失につながり、個体数の減少を引き起こしたと思われる。汽水の当水域内で生活史の大半を送る本種にとっては、汽水域の環境悪化は直接存続につながってくる。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	△	△	△													○					○	○

スズキ目ケツギョ科

# オヤニラミ

*Coreoperca kawamebari* (Temminck and Schlegel, 1843)

島根県：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧 I B 類 (EN)

### 【選定理由】

河川改修や水の汚れによる環境破壊により、生息域が狭められており、近い将来の絶滅も危惧される。

### 【概要】

全長は最大で13cmとされているが、多くの個体が10cm前後の大きさである。鰓蓋には暗朱色の線が放射状に伸び、ヨツメという地方名が示すように、その後端に眼状斑がある。体側には6~7本の横縞がある。清涼で、流れが緩やかな河川の中・下流域に生息する。砂礫底の単調な河床よりも、大小の石が転がっている場所を好む。肉食性で、エビや水生昆虫などを捕食する。産卵期は4月下旬から9月頃とされるが、産卵は5~6月にかけての期間に集中する。メスは、ヨシヤツルヨシなどの水生植物、倒れ込んでいるササの茎などに、およそ100個の卵を産み付ける。孵化するまでの間、オスは外敵を追い払ったり、新鮮な水を卵に送るなど、かいがいしく卵を保護する。国内では京都府桂川水系(保津川)・由良川

以西の本州や四国東北部、九州北部の限られた河川に、国外では朝鮮半島に生息している。

### 【県内での生息地域・生息環境】

島根県では高津川水系および江の川水系の本流や限られた支流にのみ生息している。本種を天然記念物に指定して保護活動を行っている自治体もある。

### 【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化や産卵床となる水生植物の減少。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
	◎	○									○											